



先月号に続いて『小学』のお話。

『小学』は、西暦1187年、朱熹が編纂させた初等教科書。知識の遊戯を嫌い、その根本精神は体現・体得。体で覚え行いで表すということ。体現・体得の始めは灑掃・対応・進退という三つの「節（節度）」。「灑掃」とは拭き掃除、「対応」は挨拶や返事、「進退」とは立ち居振る舞い。これら三つの節度を身につけて、「親を愛し、年長者を敬い、師を尊び、友に親しむ」という「道」を進む。これが『小学』の要諦です。



ところで、現代、灑掃（拭き掃除）をする機会はめっきり減ってしまいました。理由はいくつかあるでしょうが、こんな論調を耳にすることもあります。

今は便利な掃除道具がたくさんある。雑巾なんて不衛生で不便。モップに化学雑巾をつけたほうが衛生的だし身体にも負担が少ない。第一、拭き掃除をするAIロボットだってあるのに、何で人間がしなくちゃいけないの。人間が仕事や勉強をしている間にAIロボットが掃除すればいい。それから、上拭き雑巾と下拭き雑巾を区別して掃除するのは時間がかかる。雑巾の置き場所にも困る。洗って乾かすのも大変。時間に追われる現代では、雑巾がけは無駄が多くて、合理的じゃない。

確かに、もっともな理屈かもしれません。

合理的であることは、教育を科学的に進める上で必要なことだと思います。なぜなら、合理的・科学的であることで、私たちは成果や課題を説明することも、共有することもできるからです。しかし同時に、科学の世界はとても狭く、すぐそこに限界があるというのも事実ではないでしょうか。ですから、科学的・合理的でないということだけで、物事を切り捨てようとするのは、とても偏狭で愚かしい態度だと思います。

さて、今から25年ほど前、当時勤務していた中学校に、ある用事で私の母が訪れたことがありました。その学校は、木造の古い小さな学校。子どもたちは、挨拶や返事がしっかりとでき、振る舞いが丁寧。さらに、体操服を風呂敷に包んで持ってくるというような古い伝統が受け継がれている、なんとも味のある素敵な学校でした。現代の中学校のイメージとは、いい意味でかけ離れている。そんな学校を母がどう感じたのか、尋ねてみました。

会話の中身はほとんど忘れてしまいましたが、一つ

だけ覚えているのは、生徒昇降口を見た母が、「わたしらの時代には、下駄箱は光っていたけどねえ。」と、少し残念そうに言ったことです。

その中学校の生徒たちは、とても熱心に掃除をしていましたので、私にはとても綺麗な昇降口に見えました。しかし、母にすると泥まみれの下駄箱はダメだったのです。たぶん、母の時代なら「やり直し！」。

それから私は、生徒と一緒に「下駄箱を光らせるミッション」に取り組みました・・・と言っても下駄箱を拭くのは私だけ。なにしろ生徒にとっては、下駄箱を光らせることに何の意味があるのかわからない。納得できる理由がないし、15分の掃除時間にやることは他にもある。でも私は、ただ黙って下駄箱を拭き続けました。

すると、いつしか一緒に拭く生徒が出てきました。拭く人数が増えると、だんだんと木造の下駄箱が光ってきて、数か月後には本当にピカピカに。

そしてピカピカの下駄箱は、こんな影響を、多くの生徒たちに与えました。まず、昇降口に入る前にしっかりと靴の泥を落とし、下駄箱に泥だらけの下足を入れない。さらに、まっすぐ整えて靴を入れる。そんなふうに靴を出し入れする時の生徒たちのしぐさには、なにか品格があって、つい見惚れました。つまりそれが体現・体得であり、「進退」が整った様子だったのだと思います。

近年、脳科学や心理学など「科学」の分野から、『小学』で言う「節」のプラス効果が実証されつつあります。しかし、そんな科学の成果に待つまでもなく、灑掃が心を整え、体現・体得に至るということは、ちょっと昔の人にとっては当たり前のことだったようです。

